



複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第22号

◆ 卷頭言

明治大学文学部教授・総括責任者 石川日出志

2010年暮以来、「漢委奴國王」金印に取り組んでいる。私が専門とする弥生時代は、魏志倭人伝などの文字史料が参照できるので原史時代とも呼ばれる。しかし、学部時代は縄文時代に軸足があったので、自分は先史考古学者であり、先史考古学の視点で弥生時代を描くのを自分の持ち味にしようとしてきた。その結果、文字史(資)料について発言するのは避ける気持ちがあった。

しかし、この路線は2010年10月下旬に突如変更を強いられた。新書で弥生時代を叙述したとき、「漢委奴國王」金印にも触れて、偽物説があるけれども考古学界では誰も疑わないという事実を記した。ところが、発行の翌週、当の著名な古代文学研究者からお叱りのお手紙を戴いた。金工技術史の専門家も江戸時代と主張しており、説得的である。だが、今の自分にはお答えする力もない。そのため、自分で責任をもってお答えできるようにしますと綴るのが精いっぱいであった。こうして、「漢委奴國王」5文字と中国古印の本格的学習が始まった。

まずは、大谷光男先生の『研究史 金印』・『金印研究論文集成』を読み直し、弥生時代研究でこの金印をどう扱ってきたかを再確認する。これと並行して、文字学や古印に関する文献、および印譜・印図録・図譜の徹底収集を進め、そしてそれらと格闘する日々を重ねる。漢字の成り立ちと変遷、漢字研究史、漢籍輸入の歴史、中国古代以来の金製品の歴史、江戸時代の尺度研究や金の管理などなど、これほど多彩な分野の研究を同時進行で学ぶのは初めての経験であった。

その際にもっとも有り難いと感じたのは、十数年来、異分野の教員・院生横断の科目「文化継承学」を経験していたことである。中国古代史、日本古代史、日本古代文学など様々な方々との議論の蓄積が下支えになったと感じる。金印5文字をどう読むかは、許慎『説文解字』の「仮借」の理解が必須であった。江戸時代の文人の漢籍情報についても同僚の先生にご助言いただいた。これらが無かったら、金印問題への対応はまったく違っていただろうか。

その上で、今は、5文字を先史考古学的手法で分析する手法を自分で獲得し、中国古印考古学という一つのジャンルを構築しようと目論んでいる。

なお、私はこの金印は後漢代の製品だと断言します。

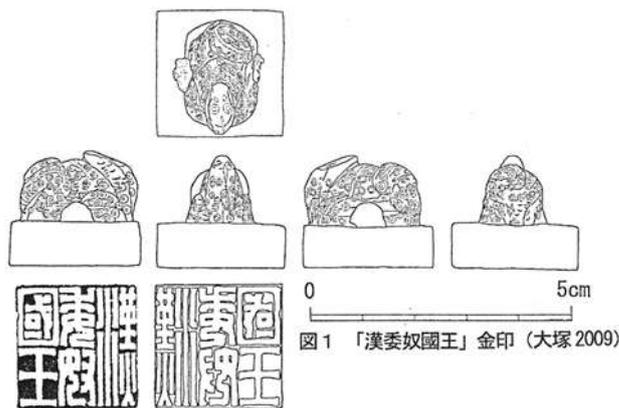


図1 「漢委奴國王」金印 (大塚 2009)

目次：

フィールドワーク

特別講義紹介

高麗大学校プログラム

P.2

中国プログラム

p.7

中国プログラム

P.4

プログラムの軌跡

p.7

南京大学大学院生との交流会

P.5

韓国小説シンポジウム

P.6

◆フィールドワーク

◇高麗プログラム

実施日 : 2017年9月6日(水)～9日(土) 3泊4日

参加人数 : 学生7名 引率者3名 合計 10名

実施場所 : 韓国(ソウル)

〈フィールド調査日程概要〉

- 9/6 羽田空港を出発、ソウル金浦空港到着。ソウル市内(徳寿園・ソウル歴史博物館・景福園)を見学。
- 9/7 ソウル市内(漢城百済博物館・オリンピック公園・風納土城など)を見学。
- 9/8 高麗大学校で学術交流会。
- 9/9 国立中央博物館を見学。金浦空港より出発。羽田空港到着。



◇参加記

博士後期課程2年 木下 幸太

雲の切れ間からは、広がる海と少しの陸が見えた。飛行機は高度を下げて、陸がだんだんと見えて来る。金浦空港へ着いた時、まだ午前中であった。2017年9月6日から9日、今年度の高麗大学校プログラムが行われた。今年度は文学および史学専攻の学生7名と教員3名、計10名が参加した。プログラム中にはフィールドワークと学術交流行事があった。教員と学生同時の交流が活発に行われ、始終、大変充実したプログラムとなった。私自身にも貴重な経験得られたプログラムであったことをまず記しておく。プログラムの概要は以下のとおりである。

6日は韓国に到着後、午後からソウル市内を散策した。徳寿園、そののちにソウル歴史博物館、景福宮を訪れた。ソウル歴史博物館では、朝鮮王朝時代から現代に至るまでの韓国の歴史を豊富な資料から概観する



ことができる。近代以後の日本文学を専門とする私にとって、韓国において、過去の出来事をどのように受け止め、そして今現在どのように歴史として紡がれているのかを目の当たりにした体験であった。

7日はまず、漢城百済博物館を訪れた。夢村土城のオリンピック公園内にあるこの博物館では、古代の歴史、特に漢城時代と三国時代歴史および文化に触れられる。ただ、発掘物が展示されているだけでなく、当時を再現したジオラマや子供向けに作られた映像コーナーなど、多くの人や年齢層に対して韓国の過去に触れてもらおうとする心配りの行き届いた博物館であった。その後、オリンピック公園内を通り抜け、風納土城へ赴いた。今では草木の茂る長い径のようにしか見えないが、1,000年以上前のこの場所は外敵からの防衛壁として土城が長く続いていた。

8日は高麗大学校との学術交流行事が行われた。両校の教員2名による講演後、学生14名による研究発表が行われた。専門とする領域は違えど、遺物や古文書、文学作品から当時の時代に触れようとする多彩な試みが紹介され、私自身も大変に触発された。

9日の午前には国立中央博物館を訪れた。午後には日本へと帰るために金浦空港へ向かわなければならない。この限られた時間の中で観られる展示品はごくわずかだ。古代から現代に至る歴史を収めたこの建物内には展示された品々はあまりにも数が多い。しかし、この展示物たちが示してくれる時間とはほんの一部で

ある。おそらくユーラシア大陸を大きく横切り、砂漠を越えて朝鮮半島へと渡って来たであろうガンダーラ様式の仏像の摩耗したかんばせを眺めながら、そう思った。

思い返せば、今回のプログラム中での体験は膨大な「触れられないもの」の存在を感じさせるものであった。人の生きた時間に触れてゆく作業は人文学の研究の多くが行うものだ。私たちは広大な時間を対象に研究する。

まるで真横を通り過ぎてゆく雄大なクジラを眺めるように。何かがあった、ただそのことだけは分かる。私たちが触れられる範囲は限られており、それ以外の

部分は想像に頼らなければならない。遺されたものを手掛かりとしながら、その長く細い径の辿り着く先を想像し一歩ずつ歩みを重ねる。この果てのない作業を行う者たちが本プログラムにおいて、おぼろげな存在の全貌を少しでも捉えるために、多様な専門領域と多彩な発想による研究を交流させようと試みた。多くの点と点とが線を描き、線と線とが像を織り成してゆく。ただ一人では、一専門領域では、一国では分からないものの全貌が少しずつ明らかになってゆく試みだ。

私たちはこの試みを複眼的研究と呼ぶ。

高麗大との学術交流会プログラム (2017.9.8)

教員講演		講演30分	司会：宋好彬（高麗大）
9:00~9:30	自挽歌における自我の混成(hybrid)と詩的正体性 —朝鮮時代の自挽歌を中心に		林濬哲（高麗大）
9:30~10:00	近代日本における「少年」の文化的多様性 —巖谷小波から谷崎潤一郎へ		生方智子（明治大）
博士課程研究発表 発表20分 討論10分			
10:00~12:30	百濟蓋鹵王時代における對北魏外交の背景と意義		安成振（高麗大）
	藤原公任の自筆からみえる公卿間の意識の相違		里舘翔大（明治大）
	朝鮮前期における『風雅翼選詩』の刊行とその意義		魯耀翰（高麗大）
	良齋崔奎瑞の上流文の研究—隠居直後の辞職流を中心に 『モスラ』論		崔恵美（高麗大） 木下幸太（明治大）
昼 食			
修士課程研究構想及び資料報告 報告10分 討論10分			
14:00~15:20	北九州石包丁の時期的・地域的特徴		田碩熙（明治大）
	古墳時代の関東における鉄鍬の編年と地域性		箕浦絢（明治大）
	2世紀における高句麗の対外拡張と周辺勢力の力学関係		金世珍（高麗大）
	高句麗の遼東半島と襄平道		李周永（高麗大）
休 憩			
15:30~17:10	平安期の荷前と穢れの関係についての試論		松元みゆき（明治大）
	後一条朝における神紙祭祀について		渡辺早貴（明治大）
	『易経』の「生生思想」の軍記物語での受容		徐家駿（明治大）
	『東人詩話』の体系について		池英源（高麗大）
	青松沈氏子文書による嫡樛村沈鎬の学問と文学についての考察		沈揆植（高麗大）
休 憩			
17:20~18:00	総合論評 石川日出志、牧野淳司（明治大）	沈慶昊、宋赫基（高麗大）	

◇中国プログラム

実施日 : 2017年11月1日(水)～5日(日) 4泊5日

参加人数 : 学生2名 引率者3名 合計 5名

実施場所 : 中国(南京・上海)

〈中国プログラム・フィールド調査日程概要〉

- 11/1 羽田空港を出発、上海浦東首都空港到着。
- 11/2 南京大学で学術交流会
- 11/3 南京博物院・虐殺記念館・南京城壁・科举博物館見学。
- 11/4 六朝博物館見学。上海に移動。
- 11/5 上海博物館見学。上海裏表紙空港を出発、羽田空港到着



博士前期課程1年 中島 皓輝

◇参加記

2017年11月1日から11月5日の5日間にわたり、本年度の中国プログラムが実施され、学生2名と引率の先生方3名の計5名での参加となった。早い時間に東京を出発し、2時間かけて到着した上海東浦空港は穏やかに晴れており、非常に過ごしやすい気候であった。

1日目は到着地の上海からさらに南京へ向かったため、移動がメインとなる行程となったが、非常に大きく、また多くの人が行き交う上海虹橋駅の様子や、新幹線の窓から見える中国の景色は、初めて訪れた私にとってどれも新鮮に映るものであった。

2日目は南京大学において、学術交流を行った。午前中は私と日本文学専修の李斌氏の、学生2人による報告となった。南京大学の賀雲翱教授、費和平氏を始め、学生18名が参加した中での報告であり、緊張もあったが、無事終わることができた。報告後は南京大学の先生方からの質問があり、非常に興味をもってくださった点がありがたかったが、それと同時に前提となる部分の説明が不足してしたことが悔やまれ、専門分野が異なる方にも伝わりやすい内容構成にするべきであると感じた。午後は加藤・石川両先生と賀教授の報告が行われた。いずれも中国と他地域の関係に注目したものであり、古代社会における、中国の存在の大きさを改めて理解することができる報告であった。

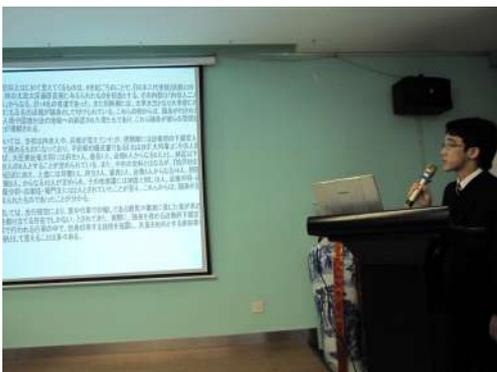
3日目から5日目にかけては、博物館の見学が行われた。3日目の南京大虐殺の記念館では犠牲者の埋葬地もあり、忘れてはいけないことなのだと強く感じられた。午後には科举博物館で関連する文物の

見学から科举の沿革を学び、中国の長い歴史と密接に関わるものであったことが理解された。個人的には日本の学制について調べていた所であったので、その淵源となる科举について知ることができとても嬉しかった。古代の文物について、日中比較の観点で見てゆくと、4日目の六朝博物館で見た瓦に人や獣の顔の文様がデザインされており、植物文の多い日本ではあまり見ないものと感じられた一方で、5日目の上海博物館での仏像の展示では、中国南北朝代のものとして、日本の「法隆寺釈迦三尊像」に似た形式のものや、所謂「善光寺式」と呼ばれる一光三尊形式の仏像もあり、2日目の賀教授の報告の中で語られた中国南朝と百済との文化の伝播の延長に、古代日本があるというお話が、形式の相似という点で具体的に理解され、非常に興味深かった。



今回のプログラムを通して、改めて古代東アジア世界において、中国文明の存在がいかに大きなものであったか、という点が強く理解された。自身の研究分野である平安時代においては、前代に比べ影響はあまり大きくはないものと考えていたが、前提となる部分に大きな影響を与えているはずであるので、今後の研究の中で目を向けてゆきたいと考えている。

最後に、今回は私にとって初の海外渡航となり、非常に不安の伴うものであったが、引率の先生方や現地の方々のおかげで、無事に終わることができた。本プログラムに関わったすべての方に感謝し、本稿の結びとしたい。ありがとうございました。



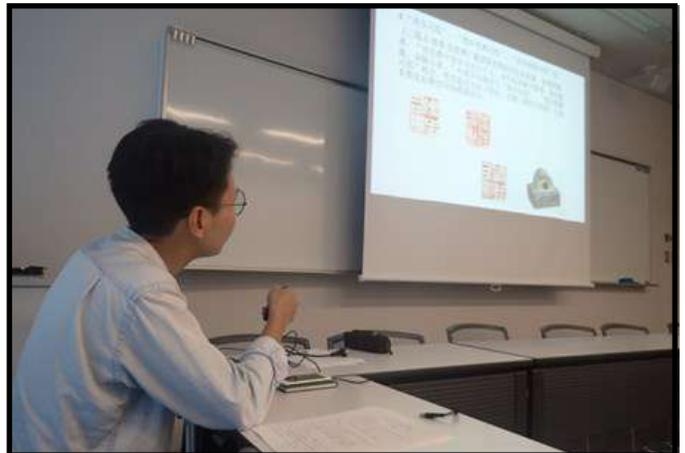
◆南京大学大学院歴史学系との院生学術交流会

実施日：2017年7月7日（金）

実施場所：明治大学アカデミーコモン

南京大學大学院歴史学系と明治大学大学院文学研究科は、毎年相互訪問して研究交流を重ねており、昨年から南京大學の大学院生が本學を訪問して研究報告して議論する取組みを始めた。今回は、7月7日（金）の5・6時限（15：20～18：50）に、アカデミーコモン8階308D教室を会場として開催し、次の3件の研究報告が行われた。張さんは日本語、高・朱さんは中国語により報告した。

- (1) 張瀟Zhang Xiao（南京大學大学院博士課程）：
河南省鞏県石窟第1窟内の彫刻と特徴
- (2) 高姍Gao Shan（南京大學大学院博士課程）：
明清時期漳州窯瓷器の對外伝播
- (3) 朱棒Zhu Bang（南京大學大学院博士課程）：
三国官印研究



過程を子細に検討した。高さんは、明清代の漳州窯瓷器が、景德鎮窯製品に比べるとやや劣るものの、港灣に立地することから西洋の要素を含む独特の風格をもつ特徴があることを指摘したのち、明代中～晩期のポルトガル・スペインのアジアでの動向を検討して、その歴史背景を考察した。朱さんは、中国古代の官印研究は近年盛んであるが、三国代官印については系統的な研究が少ないという課題があることから、後漢代官印との識別を明確に行うため、四夷印と官職名を手がかりとして詳細な検討を行った。

いずれも実物資料の具体的な検討を行う着実な研究成果であったが、現在私も中国古印の研究を進めていることから、朱さんの研究に特に注目した。私は、「漢委奴國王」金印の複眼的研究の前提として、前漢～新莽～後漢代の官印の変遷解明に取り組んでいるが、後漢後半と三国代の識別に難しい点があると感じていたので、朱さんの研究成果はとても刺戟的であった。

なお、私たちは、その後11月1～4日に南京および南京大學を訪問して研究交流の機会をもった。その際、賀雲翱教授および3氏には熱烈なる歓迎と研究支援を頂いた。今後とも相互交流を重ねる予定である。

（石川日出志）



張さんは、北魏代の石窟群の編年について、1980年代は〔雲崗→龍門→鞏県〕と理解されていたのが、近年では〔雲崗→龍門・鞏県〕へと修正された研究動向を述べた後、鞏県石窟第1窟の構造と内部彫刻の製作

◆韓国小説シンポジウム

「韓国愛情伝奇小説の世界—翻訳紹介の意義と研究の展望—」

実施日：2017年7月30日（日）

実施場所：明治大学グローバルフロント

◇参加記

博士後期課程3年 朴 知恵

2017年7月30日に「韓国愛情伝奇小説の世界—翻訳紹介の意義と研究の展望—」というテーマでシンポジウムが開催された。韓国の愛情伝奇小説である『王郎返魂伝』、『周生伝』、『英英伝』、『憑虚子訪花録』、『崔陟伝』といった五作品の魅力が若手研究者たちによって紹介され、さらに他の韓国漢文小説との比較を試みることでその展望を見出した。さらに、コメンテーターの染谷智幸教授（茨城キリスト教大学）からは比較文学論で重要なことは、比較の必然性や合理性であることが指摘され、それを確保すれば道を切り開くことができると、激励を頂いた。

また、崔致遠の説話、倭乱文学、朝鮮の文学史に関する講演があった。そのなか、鄭雨峰教授（高麗大学）は「17世紀小説史と日記の関係」という題で17世紀における文学史の構図の中で小説と日記ジャンルの相互関係について講義をされた。韓国において17世紀は本格的に小説史の時代が展開された時期でもあり、ハングル日記文学が本格的に発達した時期でもある。17世紀に『周生伝』、『崔陟伝』といった愛情伝奇小説のハングル翻訳本が流通していたことは、少数の知識人を対象に創作、流通し



ていた小説様式であった伝奇小説が17世になってハングル翻訳本が出現することによってハングル使用者の広い領域に拡散されたという重要な小説史的意味を持つ。また、日記が小説化される過程を見せる良い事例として『癸丑日記』や『山城日記』を取り上げた。自国語を使用することによって表現の力量が発展し、拡散していく過程を窺うことができた。

【開会の辞】日向一雅（明治大学名誉教授）「日本で韓国漢文小説を読むことについて」

《Section 1》多様な読解の可能性

金孝珍（明治大学兼任講師）「『周生伝』に見える西湖世界」

李興叔（明治大学兼任講師）「『英英伝』の主人公の滑稽・色好み・知性をめぐって

—日韓比較文学の観点から—」

【講演】野崎充彦（大阪市立大学教授）「倭乱文学としての〈崔陟伝〉の位相」

《Section 2》比較文学的観点からの読解

太田陽介（攻玉社中学高等学校教諭）「『王郎返魂伝』の諸問題—研究の展望」

朴知恵（明治大学博士後期課程）「『崔陟伝』の紹介と研究の展望 —一丈六仏顕現の日韓比較を中心に—」

千葉仁美（明治大学博士後期課程）「『憑虚子訪花録』とその性格」

【講演】鄭雨峰（高麗大学校教授）「十七世紀小説史と日記の関係」

《Section 3》 【講演】小峯和明（立教大学名誉教授）

【全体討論】コメンテーター 染谷智幸（茨城キリスト教大学教授）

◆特別講義紹介

◇上海博物館孫慰祖先生の公開特別講義を開催

日 時：2017年6月14日（水）・18日（日）

講 師：上海博物館・孫慰祖先生

会 場：明治大学駿河台キャンパス

テーマ：「30年来の古璽印研究における新認識—曖昧から明晰へ、マクロからミクロへ、印の中から印の外へ—」
「秦漢南北朝璽印の断代研究」

明治大学国際交流基金事業外国人学識者招聘として、上海博物館の孫慰祖（Sun Weizu）先生を6月12～21日にお招きして、14・18両日、駿河台キャンパスで公開特別講義を実施した。孫先生は、現在、古璽印・篆刻研究の最高峰にある方であり、20世紀後半までに古印研究を体系化した羅福頤の成果を受けて、1980年代から多角的に再検討を重ねて古印研究の精緻化に精力的に取り組んでおられる。

先生には、6月14日4限に①「30年来の古璽印研究における新認識—曖昧から明晰へ、マクロからミクロへ、印の中から印の外へ—」、6月18日14～16時に②「秦漢南北朝璽印の断代研究」と題してご講義頂いた。①は孫先生による研究成果の体系を、そして②はその研究法の特徴を詳細に解説する内容であった。

この公開講義には、東京大学・東京国立博物館・国立歴史民俗博物館・駒澤大学・専修大学・大東文化大学・大正大学・立正大学・新潟県立大学・樫原考古学研究所・福岡市教育委員会などに所属する考古学・中国古代史・文字学・古璽印・書道・日本古代史など諸分野の専門研究者、東京芸術院・全日本華人書法家協会・全日本篆刻連盟・中国書法家協会など書道・篆刻界の要人、さらには考古学・中国史・書道・篆刻を学ぶ多数の方々のご参加を頂いた。参加された方の中には、孫先生の講義を2回もじかに聴講できた喜びを語る方もおられた。



2010年以来、「漢委奴國王」金印研究を進める私こそが直接教えを受けたいと考えて招聘したが、多くの方々にとっても刺戟になったことを喜びたい。

招聘期間中に、孫先生に同行して、岩手県立博物館所蔵中国古印や東京大学・東京国立博物館所蔵の封泥を観察しながら意見交換できたことも、私には幸せな「特別演習」であった。

なお、今回の招聘期間中、通訳等について石黒ひさ子さんに献身的なご支援をいただいたことを付記したい。

（石川日出志）

◇2017年度プログラム（前期）の軌跡

2017/6/14,18	孫慰祖先生（上海博物館）による特別講義
2017/7/7	南京大学大学院生との交流会
2017/7/30	韓国小説シンポジウム開催
2017/9/6～9	高麗大学校プログラム（3泊4日）
2017/11/1～5	中国プログラム（4泊5日）

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

日本古代学教育・研究センター：猿樂町第二校舎3階 TEL:03-3296-4492

E-MAIL jkodaken@meiji.ac.jp ホームページ http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken